

## 総合討論

司会：荻野 和彦・原 洋之介

荻野 趣旨説明の中で、固有名詞のついた自然研究ということを申し上げました。例えば、琵琶湖における赤潮の発生のメカニズムの解明などはその一つです。そういうのは地域研究ではないということをして昨日懇親会の折に、高谷さんがずばりといったのです。高谷さんは、単に地理的な位置を指すだけの固有名詞をつけた研究は地域研究ではない。そのようなものを地域研究とっては困るというご趣旨の発言だったと思います。「地域とは何か」、「地域研究とは何か」ということを私どもはまだ明確には申し上げられません。では高谷さんの地域研究は何ですかと聞いても、これが明示的に地域研究であるとはいってはくれません。示さないけれど地域というのは、人が社会的に活動している場のことであるといっているように聞えます。社会的な人間活動ということになると、やはり経済だとか、発展だとかいうことに中心課題があるなど考えることも当然である。また現代社会がつくりあげている生態環境との関係が議論の対象になると、すぐに地球の自然はこれでいいのだろうかということに視点が注がれます。社会活動と生態環境が形成する相互作用系を念頭におきながら、地域と生態環境をめぐる話題が展開することをこのシンポジウムに期待しています。

原 地域と生態環境という大きな枠の中で、地域と生態環境というのをつなぐ第3の項目

というのをいれて、議論が展開したように思っています。その第3の項目というのはいろんな言葉が出ましたが、端的に一つだけ使いますと、開発という第3の要素を取り入れて、この両者の関係を考えるような問題提起がかなりの報告で行われたという印象を持っています。ですから、その第3の項目を入れることによって、地域と生態環境を見る視点が変わったのか、あるいはそれを入れることによって新しい地域概念というものが必要となってくると同時に、どんな新しい地域概念ができるのかというのが大きな問題になるのではないかと。ただ、その両者を第3の項目の開発ということを入れずに、直接的に関連づける方向での議論というのが、どちらかというとあまり前面に出なかったように思っています。ただ、伝統社会、固有文化、風土的規範、社会慣行とか、いくつかの概念が出てきました。多分、これらに地域と生態環境を直接的に結びつける方向での議論の手がかりがあるのではないかと思っており、後で総合討論のところで、このあたりをもう少し明示的に議論して頂いたらどうかと感じました。それから、その第3の項目である開発という概念をめぐる、いくつかの議論が出たように思います。その一つはその開発というものを引き起す原理に関する議論で、古川さんは経済原理の浸透という言葉が使われ、最後の斉藤さんの報告では、市場という言葉を使わ

れました。経済原理の浸透に関しては、商人とか企業とかいう言葉も出てきました。それから、田中さんから国と人とが開発の利益を巡って一種の競争的なゲームをやっているような状況が報告されたように思います。この辺が一つの 이슈であったのではないかと。二つ目がそういう新しい経済原理の浸透の中で地域社会、あるいは地域の人々がどういう対応をしたのか。これは田中さんの報告に一番クリアに出たと思いますが、最後の斉藤さんの報告もこの辺に絡んでいたように思います。つまり、新しい開発、あるいは経済社会状況のもとでの地域、あるいは人々の動きといったようなことが少し議論されました。そのような動きをもうちょっと突っ込むことで、地域という概念にどれぐらいアプローチできるのだろうかというのが、もう一つの 이슈になるのではないかと感じを持ちました。それからもう一つは、歴史の視点から、開発と環境保全という二項対立に関して、そういえるかどうか分かりませんが、開発の歴史というのは単線的に動いたのではなくて、それがサイクルになっていたのではないかと。いう指摘も行われたように思います。地域ごとに、空間的に、地理的範囲によって、サイクルにどんな風に違いが出てくるのかという議論をしてみることで、地域の特性というのが議論できる可能性があるように思います。市川さんの報告の中で、アフリカの市場経済の危機の中には、逆に伝統的な経済が

復活してきているような記述がありましたが、こういうのもこの論点に絡んでいるのではないかと思います。最後に非常に重要な問題である「地域と世界とをどうつなぐか」という議論がやはり提出されたように思います。特に、鎌野さんのコメントの中で、現代世界は地域と世界をつなぐが、世界の側が生物多様性条約というような普遍的な価値だとカールとかいうのを持ち込もうとしている。それに対して、地域の住民がどう対応していくのかという問題が出てきたように思います。この「地域と世界」というこの重点領域研究のサブタイトルに関わる問題も萌芽的ですが、議論されるのではないかと印象を持ちました。以上がコ・オーガナイザーとしての私の印象ですが、いまのようなことを少し念頭において、総合討論の方で議論をしていただければありがたいと思います。

**飯島みどり** 先ほどの冒頭発言の中で、ラテンアメリカを東南アジアとまったく対極に位置付けられるご発言がありましたが、それはちょっと誤解を招くものです。もちろん比較の問題ということで誇張を多分に入れられたのでしょうが、ラテンアメリカに共同体規範もタブーも何もないというようなことをいわれますと、私はラテンアメリカをやっております立場上、非常に困ります。常々この研究会に参加して感じますことは、東南アジア研究者の方は東南アジアを愛するあまりに他の地域をちょっと雑に扱いきるような気がします。

海田 少なくともパンパスとかパラグアイの大平原とか、ブラジル南部、いま、開発が進んでいるところを東南アジアの小農の世界と対比的に見ますと、ラテン・アメリカは小農の世界ではなく、やはり大土地所有が基本で、大土地所有と農業労働者が農業をやっている。輸出指向ですので、作目が非常に単純化されている。国策もそうです。商品作物のコーヒー、サトウキビ、カカオとかは世界市場に簡単に直結してしまいます。

そこで、共同体規制があるとおっしゃいました。多分あるのでしょうか、現状ではマーケットメカニズムの力をより強く受けてしまう。それが土地利用に出てきてしまうのを、私は一応専門に近い目で見てしまいましたので、大変大きな言い方になってしまいました。

高谷好一 ラテンアメリカのことが出たので、私もブラジルへ行ったことを話させて下さい。おもしろい材料を提供してくれたと思うのは、田中さんの報告でした。田中さんは目に見える地域というものでもうちょっとこうやっていこうじゃないかと非常に詳しく説明しました。環境というのは弱々しい在地の人のものと、ちょっと強い移住者のものと、その上にプランターみたいなものがやって来て、それから政府がいるという構造を考えました。それに対するコメントで、そういうセットになって自然がどんどん食い荒らされていくというふうなお話をされました。それは大変面

白く、それは日本にもヨーロッパにもありますというふうな話に持っていきますと、ちょっとやりにくいということです。大体ブラジルは草原が広がって木がありません。行ったときは非常にけしからんと思っていましたが、バスで毎日走っていて4日目くらいに特にけしからんと思った場所があります。それは、木が生えているところです。それまでは木が一本も無いからブラジルというのはけしからんと思ってきたのですが、木がしょぼしょぼ生えているのを見たら4日目くらいにはこれはけしからんと思ったのです。なぜかということ、私はもうそのときランチャーの気持ちになっていたのです。ブラジルというのは、ランチングをやる国です。木を切り払って牛を飼ってもうけるのがいいのです。木なんか少々残してやっているのは怠け者の牧場主です。私は5日目にはもうブラジル人になっておりましたから、木が残っていると「なまけ者」という気になったんです。そこで出ているブラジルの理想像、土地利用、あるいは、そこでの景観は、田中さんや海田さんがいうペザンツ中心の理想の景観と違うものなのです。文化的背景というか、その辺が違うのです。理想が違うということも視野において、環境と開発と地域を考えると地域研究はある意味で、ちょっと面白くなる。普遍論理ではなくてブラジルだったら全然違う発想だということを一度入れたらどうだろうということです。

早瀬晋三 斎藤さんが最後の方で、地域との関係が、今日の発表では、よく自分自身では分からなかったということをおっしゃいましたが、私自身は非常に重要なことをご発表になられたと思います。日本の近世以降というのは、開発と治山、治水とペアになっていると思います。近代になると、その上に利水ということが加わってきます。産業化と工業化に必要な産業用水、工業用水をどうするかということで、日本は開発と治山、治水、そして利水がペアになった考え方が非常に発達した地域だと思います。開発と治山、治水、利水がペアになっていないのが中国も含めて世界的には常識であって、日本のようにペアになってる方が、非常に例外的だと思います。中南米も例外では無く、3つがペアにならないで、どんどん行われていくことに大きな問題が現在生じているんだろうと思います。そうして世界的、歴史的に考えてみると、そういう治山、治水がペアで考えられる場所とか時代は、どういったものなのかということを考えていくことは一つのポイントだと思います。これからは斎藤さんへの質問なのですが、生態環境と風土の違いは、冒頭発言でもありましたが、風土というのはかなり人間が絡んできているという意味だと思います。そういう場合に、日本の森というのは、山里を基盤としてかなり人が入っている森だと思います。山里の人間、あるいは山里じゃなくても、森の周辺に住んでる人間は常に森に

入って、そこで何かを利用したり、その管理をしている。つまり日本の森というのは、森の周辺の人口密度が非常に世界的レベルより高いのではないかと思います。それが、中国とか、東南アジアとの非常に大きな違いで、今日の発言では、発展と人口増加ということをおっしゃいましたが、もともとの人口が違うのではないかという気がしています。その辺について、斎藤さんに具体的なデータをお持ちでしたら、教えて頂きたい。

斎藤 ご質問はある意味で難しいし、大変面白いポイントでもあると思います。ちょっと違う角度からお答えしますが、先ほどから出ておりましたコミュニティとその規制をするという仕組みの問題とも絡むと思います。勿論、地域のユニットのとり方とも絡むと思います。開発と治山、治水がセットになったというのがポイントだというお話は、なるほどそういう風な気がします。ごく普通に教科書的に答えれば、日本の場合、村の共同体がきつという言い方をするわけですが、実証研究を見ると、一個一個の村で解決しないので、必ずもうちょっと広い地域で何かが行われています。水がその典型ですが、一個の村で水の問題が規制できることはないわけで、水系に沿って行われるわけです。そうしますと、むしろポイントはどのくらいのところで、どういう力が働いていたか、それを支える何か仕組みがあったかどうかということに行き着くと思います。私自身の印象では、規制の仕

組みというのは非常に多重的な構造を持っていたのではなからうかと思えます。いま、人口のお話がありました。確かに日本は可耕地に集中して住むので大変人口密度が高い。それは結局、16世紀の末から17世紀の始めに人口密度が高くなったと思えます。高くなったような社会をどう作るかということが、社会として問題になり、でき上がったのが、我々が見ている江戸時代だとお考え頂いた方がいいという気がするのです。その段階で、高密度社会を作り上げていく仕組みは大変多重的になってきていると考えたらいいと思えます。人口を規制していく力になった一番のポイントは、私は家族のレベルの規制力があるという風に思っています。これは、単に間引いたりすることもあったでしょうが、それよりはもうちょっと広い社会的な、経済的な手段を使いながらの意識的、無意識的なコントロール、それと村のコミュニティの規制力みたいなものもあるし、それと後で作るような、もうちょっと広い水利組合みたいなものだと思います。その一番上のところで、おそらく、藩の政治権力もやはりあると思えます。そういうのが、かなり重層的になっていて、最終的には、開発と治水、治水がうまくセットになっていく社会になったというのが徳川時代ではないかと私は考えています。逆にいいますと、それなりはかなりそれが脆いところがあって、微妙なバランスの上に立っている、それが故に明治になれば、別な問題が生じて

くる、それが崩れてしまうということがあったのではないかと思えます。うまく、お答えになったかどうかわかりません。

**桜井** 古川さんの話の中の風土、これは自然環境に人間の生活が規制される、それに依存して生活も変わるし、他方、人間によって環境が変わっていく、そういう関係が風土であるというふうに、捉えたらいいのだろうかという感じで聞きました。しかし、もっとダイナミックに見て、そこに開発が入ったときに、その開発に対応するリアクションの違いに注目して地域を考えるのはどうでしょうか。

**古川** 都市をどう考えるんだ、という話がありましたが、現在の東南アジアの大都市はいわば華僑や日本や欧米の会社が作っている、現地の人はお客さんになっている、そういえると思えます。

**原** 海田さんが最後の文章を問いにせずそこから出発したいということでしたが、何かありませんか。

**市川** 勿論、海田さんのおっしゃったように最初から始めればいいのですが、実は開発とか、経済発展の中身というのは、我々はそういわれてるほど、理解していないのではないかという面があります。ただ経済的利益のためにぶちこわす、それだけが開発じゃないんじゃないかと、いう思いがあったものですか、敢えてああいう最後の締めくくりにしたわけです。もう一つは、開発ということは私が理解するところでは、何となく世界の経済

に一元化してゆくようなものを開発といっているのではないかとすると、これはちょっと大変なことになるかと思います。そういう一元化していく過程で問題はいろいろあり、それがどういう問題なのかということを検討せずに、そういう方向に進むのは、ちょっとまずいのではないかと思います。だから、どうい問題があるのか、まず洗い出してみる必要があるのではないかというわけで、これからやっていきたいと思います。

**水島** 海田さんへの質問なんですが、先ほど、ラテン・アメリカに比べて東南アジアの方が共同体、規範意識などが強いようにおっしゃられて、ラテン・アメリカの方が反論されていました。私はどうも東南アジアにおいてそういう共同体意識が、あるいは共同体規範なりが未だに形成されてないところで、非常に爆発的な乱開発が起きているのではないかと思います。これは都市もそうです。都市の中でもまだそういうものができていない。昨日の古川さんの話ではジャワ農村では、非常に定常的な安定した姿が見られるということです。それに対して、フロンティア社会は、つまり辺境においては激しい開発が行われている。そこには非常に人の移動性の高さが見られます。東南アジアでは、そもそも最初に乱開発は華僑、南中国からの移民が17, 18世紀からやっているわけです。共同体、つまりその地域を代表する人々の構成員という意識、規範意識というものの有無がどうも決定的ら

しい。生態環境との関係を見てみますと、こうした共同体意識を形成させるものは、どうも人と自然とのさまざまな関係の中で、そうした意識が出てくるということです。従ってそうした意識が出てきてない、人が足も踏み入れてないような未開発な地域、逆に、大量の人が動いて急速に爆発的にできつつある都市、この両方において開発のフロンティアといわれている現象が、どうも生じてきているらしいと、私は思っています。

**齋藤** 日本でよく共同体が強いといわれます。村八分があるとか、戦前はそれが全て悪いものの代表みたいにいわれていました。私自身は、日本における村ぐらいのレベルの共同体が強くなったのは、徳川時代になってからではないかという気がしています。なぜそうなったかということ、おそらくこれは、今日私が話をしたような、片方で開発があり片方で人口増加があり、そして、自然環境が多少なりとも危機的な状況になるという中で、それへの対応としていろんなところで試行錯誤があって出てきたまとまりが共同体になっているのではないかという感じがします。

**海田** 東南アジアにあるもの、豊かな自然観と共同体の規制、この2つを生かすのがやっぱり開発の王道ではなからうかという発言をしました。そういうと、いかにも東南アジアに強固な固い共同体的なものがあるという印象を与えますが、ないというのが常識ですね。バングラデシュでも共同体意識、コミュニティ

意識が無いというのが常識です。宗教的なリーダーシップはあるが世俗的なリーダーシップは欠如しているというのが常識で、従って、そういうコミュニティのリーダーシップとか共同体的な意識は、開発問題には一切使えないというのがバングラデシュの公式見解です。しかし、中に入って実際よく接してみると、かなり強い世俗的リーダーシップがあります。それが従来は開発問題の方向へ向かうようにはシステムができていなかったような気がします。基盤の奥の方に潜んでる共同体意識、村意識、村の公け意識というようなものを、開発の場に引張り出してくるべきではなかろうかと私は考えてます。

原 ちょっと発言させて頂きたいんですが、世界は同じではない、ラテン・アメリカも東南アジアも、見方はいろいろあるが、何か違うらしい。その違いをどうとらえるかというときに、共同体とか村だとかあるいは私と公だとか、あるいは共産党の共と協同組合の協とか、いろんな議論があるように思います。開発の前にあった伝統固有文化、伝統社会、社会規範といったものが、みんな引っかかってくるんですが、それはあるものなのか、作られていくものなのか、こういうところの議論がちょっと必要となってきた感じがしています。例えば、以前、東南アジア研究センターの皆さんが生態と歴史を議論された中で、最近どなたもいわなくなった言葉で、私が好きな言葉、農学的適応と工学的適応という言

葉があります。いま、古い証文を持ち出そうということではありませんが、その工学的適応というのは、やはり人間が努力して土地に働きかけなくてはいけない。その場合にはそういうことをやっている経験を共有してますから、公、共・協意識が形成されやすい。ところがデルタのように、フラッドが来てしまって、農学的適応をしているとバラバラに成りがちだ。こんな風に意外にその生態系と、人間の営みの関わり方がその地域の個性を決めているのではないかというアングルで議論してみてもどうだろうかという気がします。開発、経済発展、歴史のパースペクティブで地域と生態環境を比較する議論がありましたけれど、歴史の文脈の中に置きますと、変わるものなのか、作られていくものなのか、これがA03班の「地域発展の固有論理」という最大の課題です。従って、この辺の議論はありませんか。

坪内 東南アジアが永遠に同じものであったかということ、そんなことは分からない。そうでなくて、むしろ現在の東南アジアの農村の共通項を掲げてかかると、こういう風な生活は、ある時期作られたものであるという風にいつてみたい感じがしています。おそらく現在の状態は5年や10年で作られた問題ではなくて、少なくとも100年で作られた問題だという風に私は考えたいと思います。この生活が絶対に今後も続いていくかということ、そうではなくて、これもまた変わっていくだろうと

いう気がしています。それも急に大転換を遂げるかという、絶えず尾をひいて変わらない側面は持っているだろうと考えたい気がします。生態環境と人間の生活、人間の社会との関係を議論するという事は相当スパンの長い引きずり方を念頭に置く必要があると思っています。

足立 いま坪内さんがいわれたことに大賛成ですが、もう一つ付け加えたいのは、今回のシンポジウムの全体の発表の基調は、未来の課題から過去とか現在を描き出し過ぎであるという気がするのです。つまり、破壊されつつあって、将来それがなくなってしまう東南アジアの自然とか森ということが前提で、破壊を抑えるためにどうしたらよいか、そのために過去とか現在を再構成してるとしています。ですから、かつてあったかどうか分からないようなタブーとか、共同体規制にこだわってしまう。それは常に変化して出てきたり、引っ込んだりするものだと思います。東南アジアの破壊の一番の原因は東南アジアの人たちの欲望を規制する力が弱いのではなくて、先進国がどんどん物を買っているという市場の問題です。だから、むしろ破壊とか未来の東南アジアのことも非常に大事だとは思いますが、それをあまり強調せずに、高谷さんがいわれたように、ブラジルで木が何にもないところでもいいではないか、そういうその地域の特性、人々の地域の自然を見る見方も含めた環境と人間のユニットを考えたい。

原 歴史のパースペクティブの中で、ある地域の個性がどんな風かということについて、上田さんが最近面白い本を書かれていますので、一言上田さんの意見をいまのところに関連してお聞きしたいと思います。

上田 議論する際に、作ったか、作られたかというような議論をせずに、両方含んだ議論が必要なのではないかと感じています。私の本は『伝統中国』という表題ですが、本来考えていたのは『生成する伝統社会』という題名です。住民が成長していった、山がある、川があるという環境の中で、人間が分節化していく過程というのは、一つの文化であるわけですが、それは子供として生まれて成長していく段階において、人間が既に歴史的に作り上げた環境を受けとめ、そのような分節化の仕方を文化として身に付けていく。人が生まれて文化的に周辺環境を読み取るということに身に付けて、更に、自然に関わっていく。そういう循環を含んで、その伝統的な景観を常に生成し続けていると見るしかないのではないか。それが近代化による変化の中で対応しきれなくなっているというところが、現在の様々な地域での環境破壊であるかと思っています。中国等においては、いま非常に急激な勢いで環境破壊が進んでいるという状況で、私は非常に危機的な意識を持っています。

原 高谷さんに質問したいのですが、先ほどブラジルはそれでいいではないかといわれました。そうしますとブラジル型で何でも切っ

てしまえばいいとなると、古川さんあるいは田中さんのに出ていると思いますが、世界と地域という問題はどうなっていくのでしょうか。これはシステムの問題なんです。システムというのは自己運動するということで、世界中がグローバル経済ということでつながってしまった。世界を支配しているのは多国籍の銀行です。そういう状況下で、ブラジル型社会が世界を覆っているのではないかということです。アメリカの経済は資本主義、資本主義というのは何かというと、何でも私的所有対象物にしていく世界です。例えば田中さんが今日報告されましたように、国家がコンセッションを与えるのは、私有財産ではないんですけど、国家の私有財産だという形で、生態を利用します。農民の方は、それを予定しているうちに私有財産化しておけば儲かるはずだということでゲームが始まる。そういう形で、世界資本主義システムという問題を考えると高谷さんのように解いたら世界中、ブラジル化するのではないかなと思ったのです。私の質問は、世界と地域という辺りのこともちょっと含めてです。

高谷 私はブラジルみたいな方法でやればいいと言っているのではないのです。ブラジルには、あの広い牧場を持って木を全部切ってしまうと、牛がたくさん飼えるようにすることこそいいのだという風なこと、それしか考えてない人がいっぱい住んでいるということです。そういう所があるのだという認識をし

ておきませんかということなのです。田中氏の発表を非常に高く評価したのは、森に小さなコミュニティ、つまり採集か何かしているのが、作物を作り、自然態の格好で森に囲まれて生活していくという長い長い森の中での歴史を経てきた社会には、彼の分析が当てはまると考えたからです。私はブラジルをずっと彼の分析の手法で考えていたのですが、全く違うんです。すみませんが、同じ態度で、どなたかブラジルの話をしてくれませんかということです。最大のランチャーなんていったら、一人でベルギーくらいの大きさの面積を切ってしまうと、これこそ正しいんだと言っている地域がある。そこで、地域はなんぞやということを一生涯我々と同じように議論している人達がいるんだということもまず知りましょう。それでいいですよというのではなくて、そういう風に違った世界がいろいろあるのを知った上で、どの地域がどうしているのか、まず把握しましょう。それから海田さんが言うように、世界全体共存していくためにはどうするかというところまで行けば、地域研究だと思います。

さて、つぶれるときのことを吉田さんが言われましたが、吉田さんはあれで議論打ち切りという提案をしたわけではありません。このまま放っとくと、都市の権力者は全部収奪するといいますか、要するに世界システムを肯定していますから、やれ、やれと言う。我々は、これ以上やってたら自分で自分の首をし

めるぞと思いきるギリギリのところまで行くでしょうが、そのときに、替わりのシナリオはこれかと、それは結局多様な地域だということに、はっと思い当たるに違いない。そこまではいきますということを彼は言ったんです。彼は世界システムという言葉ではなく、都市という言葉を使いましたが、多様な地域の概念は結局、世界システムを破壊するとか、世界システム、そうではないんだよという代案なのです。それへの提案の大きなフレームワークは、いまも言いましたようにタイプとして世界で三つか四つくらいでしょうが、全く違うところがある。それは方向転換出来ない。その中で坪内さんがいわれた百年くらいのスパンの強弱だとか、うねりがあると思うんです。その全体の見通しがうまくいかないだろうかと。これが、地域研究かなあという感じです。だから、世界と地域との関係もそういう風に考えています。

原 いま高谷さんが言われた市場経済とか、経済のグローバリゼーションですが、これはいいことなんだ。これは普遍システムだという意見が私のような経済学者の中にあります。世界銀行、IMFにいるエコノミストは、大体そういう考え方を取っていますが、それに対していま高谷さんが言われたそれはアメリカ型の市場経済に過ぎないんだ、そういう普遍主義は相対的なものだということを強く知識人としていうことが一つ重要だと思います。そうはいっても世界中が銀行の利子を基準に、

儲かる、儲かると動きだしますと、世界が現実、その方向に行っているとなると、ここにやはり危機感がある訳です。

田中 高谷さんが世界単位と言う形で言われるときに、それはどうも景色ではないかと思えます。それに対して風土というのは、人と自然がお互いに交流しながら作っていったもので、その総体が風土だと思います。南アメリカへ行って4日ほど経ったら、やっぱり木が生えていたらだめだという気持ちになりました、という高谷さん独特の言い方ですが、普通の人たちは、変幻自在に、それも向こうの気持ちにはなれないわけです。私の用語からすればやはり景色だと思います。風土というものになりますと、先ほど原さんが農学的適応とか工学的適応とおっしゃいましたが、そういった全体の人の働きかけです。そして働きかけによって作られた風土はまた変わっていくと思います。そういう意味で、地域を考える時に、我々は景色を考えるのか、あるいは風土を考えるのかとなります。仮に、景色とした時には、代表的な風景みたいなものを地球の上に網羅的に並べていくか、あるいは代表的なものを、例えば東南アジアにはこの絵、日本にはこの絵ですというような形で、額縁を並べるように地域を区分できると思うんです。

ところが、高谷さん流に表現されたような景色で地域を区切るのならともかく、風土を共有するところは、どこで区切れればよいのか

わからないわけです。例えば政府のプランテーションにその土地の人たちが反対をして、何らかの形で自分たちの地域というものの独自の権利を主張しだしていくと、それは彼らの風土になってくると思います。風土というような概念で地域を区切るのは、ですからかなり難しい。そう簡単に、景色のようには固定的にとらえられない。景色と風土という言葉で地域をとらえ直してみたらと考えているところです。

高谷 一言だけ。田中さんが言われたとおりだと思います。風土でやるべきです。絶対にやらないといけません。だけど、キリンや朝日のビールに貼ってあるラベルのような風景を、とりあえず一回並べてみて、それであとから詰めましょうという話なんです。それでいつのまにかビールがお酒になっているかもしれない。内容は変わるものですが基本的には変わらないものがある。それが地域と生態といわれているわけです。ここが頑張りたいところなんです。変わらないものが絶対あります。だけど相当大きく変わります。同時に解決は得られないが、世界との関係です。世界との関係をどう調整するのかわからないけれど、こういうことを議論する者としては言っておこうではないかという話です。

中村 二日間で大体主な論点が出尽くしたかと思いますが、三つばかり申し上げたいと思います。まず地域ですが、いま高谷さんが変わらないものがあるといわれました。確かな

地域とは何だろうか、単一の地域概念を考えると、高谷さんの世界単位ではありませんが、地球を一つにした世界、これは変わらないもので、これは全ての出発点だと思います。従って全地球をおおい尽くすものとしての世界システム、これはよほどきちっと見ないといけないのではないか。そのあとの地域概念については高谷さんの世界単位も含めまして、多義的、多重的、多元的、多層的であり、しかも時代と共に変わりやすいもの、変わりにくいものを、いろいろこの中に見ていく必要があると思います。二番目に自然理解ですが、自然と人間を対比させて議論する考え方、例えば自然の生態環境を人間の開発行為が破壊しているというふうに見る見方、それを一つの典型とすると、もう一つは人間を含む自然という見方、これもいろいろニュアンスの差があります。例えば古川さんがどちらかと言えば、自然と人間を対比させるような形で報告されたのに対し、市川さんは人間をふくむ自然ととらえようとされたというふうに、無理にくくっていくと、自然理解の違いが、いろんな風土の理解の仕方に関わってくると思います。三番目にここに集まっている知識人とか、研究者と言っている人達はどうも江戸時代の士農工商の価値観をひきずりすぎやしないだろうかという気がします。仮に知識人が士農工商の士だとすると、次に農学的適用がよくて、その次に工学的適用がよい。一番最後に商学的適用がおかれ、商学的適用と

というのは本当に困ったものだ、商品が世界を流通するシステム、市場経済が自然を破壊するんだと、つい我々は江戸時代の価値観を引きずりこんで考えがちです。本当は土農工商に大した差はないのでして農学が特にいいわけでもなければ、工学が特にいいわけでもないし、商人が特に悪いわけでもない。いい商人がいれば悪い商人もいる、いい農業があれば悪い農業もあると考えるべきです。市場経済というと、商業が持っていた、市場が持っていた積極的な偉業を土農工商の立場から排除しがちですから、これからはぜひ商業も積極的に評価していただきたいということをつけ加えさせていただきます。

吉田 このシンポジウムで荻野さんの班にいまして、全体の議論の流れとして、やはり環境破壊というのは一つの非常に大きなテーマになっています。環境破壊、それ以外にももちろん生態環境と地域を結ぶ筋道はいくらでもある。ただ全体としては、環境破壊、生態環境の破壊ということにつながったトピックはかなり多くなっています。生態環境の破壊ということの一つのトピックとすれば、それと地域研究をつなぐ地域というものの価値を言い、地域というものを支えているのが生態環境であり、その生態環境が破壊されていくと、地域も破壊されていくという、そういう形の論議にやっぱりなるだろうと思います。それによってその地域研究と生態環境というのはつながるだろうという筋道を見ただけで

す。それに関わって開発という問題ができて、世界システム論も関わってきて、生存のための開発と世界経済につながった商業的な開発という二つのものがある、結局破壊は後者の方だという話になってきます。しかし、生態環境と、これが地域だと思えるものと、どういう関係にあるのか。社会が変われば生態環境も変わる。生態環境が変われば地域も変わるという、もう少し具体的な話が前面に出てくる方がいいのではないかというのが私の個人的な意見です。いままでのお話でも、地域というのは非常に大きな地域になったり、村単位の地域になったり、いろんな話が出ています。地域研究の難しさは、地域が何であるかということのコンセンサスがないうままに、ずうっときてるといことがあります。そのために、例えば村の話も日本という単位なのか、あるいは東アジアという地域を言っているのかということとで話の内容が全く違うんです。実は生態環境と地域というのはなかなか難しいトピックでして、実際には色々な試みをやっているんですが、なかなか上手に乗らないところがあります。それは一つには生態学者というのはなかなか分を超えないということもあります。あるべき形は生態環境と、ひと固まりとしてある地域と、相互のインターアクションをもう少し掘り下げて、具体的な例で検討してみるのが一番いいのではないかというのが私の印象です。

原 中村尚司さんがいわれたことと、いま吉

田さんがいわれたことがちょっと重なっているような気がします。自然と人間を対立的に見るのか、一緒と見るのか、このあたりのもこの見方をもう少し人文社会系の方と、生態学の方がうまく対話ができるかどうか。それから文化人類学という、人間を取り扱う人たちにこの地域の人間は自然をどう理解しているのかというような自然認識の問題をもう少しと前面に出して議論をしていただき、もう少し生態学の方と人文社会系の研究との接点が出るのではないかと期待感みたいなものがありますが、難しいだろうなという気がしながら聞いていました。

荻野 生態環境の研究領域に属していると思っている者が使う言葉と人文科学、社会科学に属している研究者が持っている言葉の違いを克服するのはやはり難しいと思いました。昨日、井上さんと松永さんが話した中でモノは自然の生態過程の中で理解できるが、生態環境のシクミは人間社会のことだという趣旨の発言があったのを聞いて実はかなりショックを受けました。生態環境という自然にも当然ながらモノがありシクミがあるはずで、生物は社会をつくっている。アリや、ミツバチなどのように社会性昆虫といわれるものだけではなくて、一つ一つの生物種が社会と呼ぶにふさわしい組織を持っていると思います。ただし、それが人間社会の組織と同じ内容を持つものといってしまうといとは限りません。そのあたりについて、いつになったら生

態環境、社会・人文科学関係者の間に対話が始められるのかという感じがします。昨日、今日の話は開発、発展ということが第3の軸になると原さんがいっていましたが、これがないと地域と生態環境をつくりあげているシステムの動的な仕組みというものが見えてこない。動的な仕組みを見つけようとすると変化の方向性を見ておかなければいけない。変化する地球上のシステムというものを考えると、存在するものは全部その中に仕組みられています。変化に参加しているといってもよい。冷徹な科学者ニヒリズム、人類は早晚死滅する運命を持っている、その過程を科学者の目で、克明に記録していく立場があるという主張があります。しかし、そういう主張をする研究者自身その中に仕組みられている、参加させられている。私はそういうすべてが参加になるという見方にたつ必要があるのではないかと、参加していることによって全部がつながっている、連関している、そういうシステムへのアプローチを考えなくてはならないだろうと考えます。そういう仕組みは、常に変化していかだろとうと思えます。変化した結果できあがるシステムはいまあるシステムの中にモノもモメントも主要なものがあるとみないといけないのではないかと思います。もちろん変化することは現在システムが同じものを再生するだけではなくて、ちょっとずつ作り替えていく、進化のための仕組みがある。創造的に変化することが必ずあるのではない

かと思います。

原 最後に荻野さんがあと2年間の全体としての可能性を指摘してくれました。ちょうど時間にもなりましたので、シンポジウムというものはどうせ結論なんかでるものではないのだというのが事前の了解だと思いますので、結論めいたことは何も言わずに、これからも考え続けましょうということを書いて締めくくりたいと思います。坪内さん、最後のご挨拶をできればお願いします。

坪内 昨日はよんどころないことが起こりまして、最初にご挨拶申し上げるべきところ出席できません、今朝から参加させてもらいました。どうも多数ご参加いただきましてありがとうございました。この重点領域研究第2回シンポジウムが地域研究と生態環境の関係を絶えず問題にしながら展開しましたのは大変嬉しいことです。地域研究がいわゆる社会科学の独占物であった時代がどうも長く続い

てきたような気がします。しかし、総合的  
地域研究という重点領域研究の一つの目標は、自然科学系の研究者の、地域研究への本格的な参加、あるいはその可能性の表明ないしはそれへの呼びかけでした。総合的  
地域研究のもう一つの目標というのは地域と地域を鳥瞰するような立場、そして相互に位置づけるような方法を見つけること、すなわち地域間研究の導入を試みようとしていることです。こういうふうな新しい試みを含んでいる総合的  
地域研究というのが私どもの重点領域の目標ですが、それは地域研究の自己主張と自己拡大をめざすものと言えるかと思います。ちょうど2年目をまさにあと1ヶ月足らずで終えようとしています、そういったときによく焦点が定まってきたという印象を受けております。今後のご支援をお願いして最後のご挨拶にかえさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。